

旧約時代の預言者エレミヤの生きた時代は、とても暗い時代でした。神の民は、常に、神の国の到来を、救い主のあらわれを、解放と回復の時を待ち望んできました。特に暗い時代には、熱心に、救いの日を待ち望みました。

ユダヤの人々は、ダビデとソロモンの時代、平和で豊かでしたが、ソロモンの後、国が南北に分かれ、苦しい時代を通りました。それでも、それぞれは独立を保っていたのですが、北王国イスラエルはアッシリヤに滅ぼされ、南王国ユダもバビロンに攻められ、王も指導者も捕虜としてバビロンに連れていかれました。バビロンから多額の貢物を要求され、国としての独立が保てなくなっていました。バビロンに逆らったユダは、ついに、首都エルサレムをバビロン軍によって包囲されてしまいます。

その時、預言者の多くは「心配するな。エルサレムに神殿がある以上、神はエルサレムを守ってください。だから、バビロンに立ち向かおう」と言っていました。「彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている」エレミヤ 6:14 と書かれてある通りです。そんな中で、エレミヤひとりが「あなたがたはバビロンの王のくびきに首を差し出し、彼とその民に仕えて生きよ。」エレミヤ 27:12 と預言しました。つまり敗北し、奴隷状態となって生きていくことになるということです。もちろん、その言葉は大きくユダヤ人の怒りを買ひ、心を傷つけました。そのため、エレミヤは、捕まえられ、「監視の庭」というところに閉じ込められてしまったのです。

「エルサレムに神殿がある以上、神はエルサレムを守ってください」というのは、いかにも、信仰的、愛国的な言葉です。それは人々の耳には、勇ましい言葉として、聞こえの良いものだったでしょう。しかし、それは神からのことばではありませんでした。その時のユダの国には、もはや真実な信仰が消え、ほんとうに国を思う人が誰もいなかったのです。そんな中でエレミヤが神から聞いたとおりに預言のことばを語るのには、命がけのことばでした。多くの預言者が時代に逆らって真実な神のことばを語ったため、苦しみを受けてきました。エレミヤもまた例にもれず、捕まえられ、「監視の庭」に閉じ込められたのです。そればかりか、その庭の深い穴に、縄で縛られ、吊り降ろされ、泥の中に沈められました。しかし、人々がエレミヤをそんな風に苦しめたことは、そのままユダの国にやって来る災いを示す預言となりました。やがてエルサレムが滅ぼされ、人々は、縄で縛られ、捕虜となってバビロンにひかれていく、栄光ある神の民なのに、泥まみれの辱めを受けるということを表わすものとなったのです。

神のことばは、それに逆らったからといって、それを押しとどめることはできません。神のことばを語る預言者を苦しめたからと言って、神のことばが力をなくすわけではありません。古今東西、為政者の批判や悪口を言う者を罰したり、遠ざけたりします。しかし神のことばは、消えるどころか、それに逆らった者に裁きとなって成就し、預言者を苦しめた者たちに災いとなって返ってくるのです。ですから神のことばを常に聞いている私たちですが、それに慣れてしまって、神のことばを軽く扱っていないか注意したいと思います。神のことばを聞くには聞くが私に神が語っているように受け取らないとするなら神の恵みも祝福も私には帰ってこない可能性が高いのです。

神のことばは、それを軽んじたり侮る者には厳しく立ち向かいますが、それを信じ、受け入れる者には、神の恵みと幸いを与えます。エレミヤは、偽りの預言者のように、人を喜ばせる言葉、気休めの言葉を語りませんでした。はっきりと、人々の罪を責め、神の裁きを宣告しました。しかし、同時に、神がその罪を赦し、人々を回復してくださる、その日、その時が必ず来ると預言し、人々に希望を与えました。

やがて、ユダの国は滅び、王が途絶え、人々は他の国で奴隷となっていきます。しかし、神は、そこから人々を救い出し、もとの町に連れ帰ってくださいます。33章の6節から次のように書かれています。「見よ。わたしはこの町の傷をいやして直し、彼らをいやして彼らに平安と真実を豊かに示す。わたしはユダとイスラエルの繁栄を元どおりにし、初めのように彼らを建て直す。わたしは、彼らがわたしに犯したすべての咎から彼らをきよめ、彼らがわたしに犯し、わたしにそむいたすべての咎を赦す。」エレミヤ 33:6-8

いったい、歴史の中で、一旦滅びた国が再び興るといことがあったでしょうか。どんなに力ある大帝国も、歴史の舞台から姿を消していきました。しかし神は、一旦滅びたエルサレムをもう一度よみがえらせると約束され、そのとおりのことをなさいました。しかも、その回復は、たんに政治的、経済的なものではなく、霊的なものでした。神に逆らい、神に滅ぼされた国が、神によって赦され、祝福され、再び神に従順な国になるというのです。イスラエルとユダの復興は、イエス・キリストによって私たちにもたらされた神の国を指す預言です。イエス・キリストの神の国は、ユダヤの人々だけに限らず、どの国のどんな人にも開かれています。どんな人でも、どんな状態に沈んでいたとしても、そこから解放され、神の義と愛とが支配する神の国の喜びの中に生きることができます。神の恵みによって赦され、いやされ、きよめられて、本来の自分へと回復していくのです。それがイエス・キリストの福音です。

今日の14-16節は、人々を神の国へと導く、救い主イエス・キリストを預言しています。「見よ。その日が来る。――主の御告げ――その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家に語ったいつくしみのことばを成就する。その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を芽ばえさせる。彼はこの国に公義と正義を行う。その日、ユダは救われ、エルサレムは安らかに住み、こうしてこの町は、『主は私たちの正義』と名づけられる。」この箇所では「正義の若枝」と呼ばれているのはキリストのことです。王であり、主であるキリストは、人々を罪の奴隷から解放し、ご自分の民とし、その先頭に立って導いてくださるのです。イスラエルの人々はエレミヤの預言のことばによって希望を抱き、主を待ち望み、ついに、預言の成就を見ることができました。私たちも、どんな苦しみの中でも、神のことばを信じ続けるなら、それが、明日を切り拓く希望となるのです。

神のことば、預言のことばは、じつに、信じる者には希望のことばです。エレミヤ 29:11 に「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」とあります。じつに神のことばは、私たちに「将来と希望を与える」ものです。神のことばがなければ、私たちは、将来に希望を持ち、救いの日を待ち望むことができないのです。

「待ち望む」、それは、信仰のことばですが、考えてみれば、私たちの人生は、常に、何かを待ち望んで過ごしています。小さいこどものころは、幼稚園や学校に行く日をわくわくしながら待っていたことでしょう。成人した後は、学校を終えて社会に巣立つのを待っていたことでしょう。今も私たちは明日どうなるか不安はありますがさらに何か良いことが起こるかもしれないと思い、待ち望んで、過ごしているのです。「明日はきっと良くなる。もっと明るくなる。」そんな確信があるから、たとえ今、どんなに辛いこと、苦しいことがあっても、それに耐えることができます。病気で入院することがあっても、必ず良くなるという希望があれば、退院する日を待ち望んで、痛みをこらえることができます。けれども、その病気が治らないもので、どんどん悪くなっていくとしたら、天国の希望がないかぎり、病気の人、看病している家族も、毎日がどんなに辛いものになるのでしょうか。

神を信じる者が、様々な困難なこと、とりわけ、自分の力でどうにもならないことで苦しむとき、もし、そこに明日への希望が、将来に関する神の約束がなかったら、どうやって困難を乗り越え、なおも、神に頼って生きていくことができるのでしょうか。希望を捨て、あきらめの中に生きるしかありません。信仰者に希望を与え、神を待ち望ませるのは、神のことばです。詩篇 130:5 に「私は主を待ち望みます。私のたましいは、待ち望みます。私は主のみことばを待ちます。」とあります。暗い時代であればあるほど、また、自分の人生で一番の谷底と思えるような時であればあるほど、その暗闇を照らす光、神のことばをしっかりと握りしめていたいと思います。

コロナ禍で最近少し減りましたが、時々ラーメン店やお昼のランチで行列を作って並んで待っている人を見かけたことがあります。また iPhone や ゲームソフトの新製品の発売日には、販売店の前に長い列ができます。徹夜で並ぶのだそうです。でも、その人たちは、どんなに寒かろうが、眠かろうが、平気です。珍しいもの、美味しいものを食べたい。誰よりも早く新しいものを手に入れたいという熱心があるからです。人々が地上の小さなことにさえ、それほどの熱意をもって行動するのだとしたら、神を信じる私たちは、霊的なことにおいて、それ以上に熱心でありたいと思います。ぼんやりと時を過ごす人にも、熱心に神を待ち望んで、励む人にも、一年は 365 日、一日は 24 時間、一時間は 60 分で、かわりはありません。しかし、主を待ち望む者には、その一時間が、一日が、また一年が密度の濃いものとなり、充実したものとなり、やがて来る、救いの日に、大きな喜びをもたらすものとなるのです。そうではないでしょうか？ 期待を持って待ち続け、そしてその日には期待以上のものを得るなら人生をより忍耐を持って生きていけるのではないのでしょうか？

今、困難な課題を抱えている人は、あきらめず、投げやりにならず、神がその困難の中に道を切り開き、明日に向けて進ませてくださることを、信じ、祈り求めたいと思うのです。神は、「わたしは傷をいやす。建て直す。赦す」と約束しておられます。神はじつに裁きの神であると同時に回復の神でもあるのです。またそれほど今、特に大きな問題もなく、恵まれた生活を与えられている人は、そのことを感謝しながら、与えられたものを生かして神のためにどう働くことができるか考えていただきたいと思います。「見よ。その日が来る。」そう信じて、神の救いの日を待ち望んだ信仰者たちにならって、今週も、この礼拝から、明日に向かって歩み出しましょう。